（世界史）　傾向と対策

傾向

教科書レベルの出題、基本知識を中心に満遍なく

❶出題形式

R 方式は大問が〔Ⅰ〕〔Ⅱ〕の全 2 題構成で、〔Ⅰ〕は小問 10 題、〔Ⅱ〕は小問 15 題（合計 25 題）。解答はいずれも 1 問 1 答のマーク式で、試験時間は国語とあわせて 80 分である。その他の日程はいずれも大問が〔Ⅰ〕～〔Ⅳ〕の全 4 題構成で、各大問は小問 10 題で構成されている（合計 40 題）。解答はいずれも 1 問 1 答のマーク式で、試験時間は 60 分である。

❷出題内容

・R 方式

〔Ⅰ〕、女性のジェンダー・参政権をめぐる問題を中心とした出題。「ア」ではインドネシアのカルティニ、「イ」は『女の人権宣言』をそれぞれテーマとし、全体的に近代史に関する問題が多くを占める。

〔Ⅱ〕、近代ヨーロッパ諸国の貨幣を出発点に展開される出題。内容は 19～20 世紀にかけてのフランス、イギリス、ドイツ、ロシアを中心とした近現代史の出題が目立つ。

・2 月試験（前期）2 月 3 日

〔Ⅰ〕、中世～近世にかけてのヨーロッパ史を中心とした出題。本文のテーマがグロティウスと自然法思想であるため、ドイツ（神聖ローマ帝国）や中世の神学・近世のデカルトなど文化史の内容が目立った。

〔Ⅱ〕、塩をテーマとした出題で、「ア」ではハンザ同盟、「イ」では中国王朝における塩の専売、「ウ」はガンディーの「塩の行進」がそれぞれテーマとなっている。「ア」のハンザ同盟に関する問題は地理的な知識など応用的な内容の問題も見られる。

〔Ⅲ〕、ティムール朝を中心に、近世イスラーム世界に軸を置いた出題。内容・難易度ともに、全体的に平易な出題である。

〔Ⅳ〕、地図を用いたアジア近現代史を中心とした出題。正解とならなかったものも含め、本問で示された地名は、いずれも地図上での場所と名前が一致できるよう、チェックをしておくことが望ましい。

・2 月試験（前期）2 月 4 日

〔Ⅰ〕、中世～近世にかけてのヨーロッパ史を中心とした出題。本文のテーマがリトアニア=ポーランド王国（ヤゲウォ朝）であるため、東ヨーロッパに関連する出題・選択肢が半分程度を占める。押しなべて平易な内容の正誤を問う問題がほとんど。

〔Ⅱ〕、近代オスマン帝国を中心とするイスラーム世界に関した出題。選択肢の内容正誤を問うものだけでなく、地図を用いたもの、時系列に沿った出来事の並び替え問題も含まれる。

〔Ⅲ〕、古代オリエントおよび古代中国を中心とした出題。本文中の空欄にあてはまる語句の「組み合わせ」を問う問題が目立った。

〔Ⅳ〕、近世以降のアジアを中心とした出題。条約の内容や出来事の説明など、単純な語句やキーワードの正誤にとどまらない問題が見られる。

・２月試験（前期）2 月 5 日

〔Ⅰ〕、カペー朝・ヴァロワ朝の時代のフランスを中心とする出題。中世ヨーロッパに関する問題が 6 割を占め、フランスだけでなくイギリスとの関わりにも注目する必要のある問題も目立った。

〔Ⅱ〕、「大航海時代」のスペイン・ポルトガルを中心とする出題。問 3 にある「大航海時代」の航海士の航路は、いずれも出題頻度の多いものなので、この問題でしっかりと押さえておきたい。

〔Ⅲ〕、唐の太宗が記した『貞観政要』をテーマとした出題。８割が清（19 世紀以前）までの中国史を中心とする問題となっている。

〔Ⅳ〕、インド史を中心とした出題。問題は前近代のインドが多く、問 3 のガンジス川の位置を問う問題や、問 8 の建築物と為政者の組み合わせを答えさせる問題が特徴的な出題である。

・２月試験（後期）2 月 21 日

〔Ⅰ〕、近世初期のルネサンスをテーマとする出題。問題は古代から近現代まで比較的幅広く、絵画や暦と絡めてモンゴル帝国やイスラーム世界に関する出題も見られた。

〔Ⅱ〕、マルコ=ポーロの『世界の記述』をテーマとした出題。内容はイスラーム史、東西交流（シルクロードに関するもの）、キリスト教とこれに関する文化を問う問題が、ほぼ同じ程度の割合を占めた。

〔Ⅲ〕、フランスのギメ美術館をテーマとした出題。内容は文化史に関する問題が４割ほどを占め、アジア（中国・インド・イスラームを含む）の文化が支配的であった。

〔Ⅳ〕、中国・山西省をテーマとした出題。８題を中国史が占め、残りは朝鮮半島史、同時代史の出題で構成された。

・３月試験３月４日

〔Ⅰ〕、「大航海時代」をテーマとした出題。南北アメリカ大陸の古代文明が支配的で、作物やアイルランド移民に関する問題など、ヒト・モノの移動を背景とした問題が目立つ。

〔Ⅱ〕、古代から近現代までの西洋史を中心とする出題。古代に関する出題が多く、近世以降は問１、問２、問10の３題にとどまった。

〔Ⅲ〕、インドネシアの伝統芸能であるワヤン（影絵）をテーマとした出題。前近代の東南アジアと、ワヤンに影響を与えたインドに関する出題が目立った。

〔Ⅳ〕、安禄山をテーマとした出題。唐の歴史、および唐の制度に影響を与えた魏晋南北朝時代を中心とした問題であった。

❸難易度

全体的に教科書レベル。問題内容が教科書を大きく外れるものは基本的にない。難易度、問題の分量、時間のいずれもおおむね過不足はなく、以上の傾向はほぼ例年通りと言える。例外としては、２月４日〔Ⅲ〕問６で「殷墟は、殷の前期の都の遺跡である。」など、一部の出題は若干難易度が高く（とはいえ難関というほどのレベルではない）、問題形式の演習も含めた「慣れ」が要求される部分もある。また、受験生が苦手としやすい文化史の分野や、盲点となりがちな日本史的な内容は、受験生の間でも差がついたかもしれない。満点に近い高得点を目指すのであれば、こうした差がつきやすい分野まで目の行き届いた対策を心掛けたい。

対策

基本知識をベースとした演習で定着を

出題が教科書レベルとはいえ、単純な知識問題に終始しているわけではない。例えば、「○世紀の出来事として正

しいものを選べ」といった同時代史を問う問題や、比較的近い時期の出来事の並べ替え問題などはその典型である。時系列が問われる問題は、「××年」というピンポイントな時点よりも、まずは「■世紀」といった 100 年単位でつかむべきであり、この傾向は立正大学の出題においても有効である。

過去問演習だけでなく、演習に適しているのが旧センター試験であり、近年の共通テストよりも問題形式や難易度も共通するものが多い。2015～2020 年の旧センター試験の全国平均点は 65 点前後であり、正答率が 6 割 5 分に達していなければ基礎知識の定着を、７割～８割程度であれば文化史や日本史、時系列といった受験生の苦手とする分野の徹底を、それぞれ心掛けるとよいだろう。